

北国街道を

歩いてみませんか

三浦市 杉臣 武（幸町出身）

北国街道を名乗る街道はあちこちにあるが、私にとってのそれは出雲崎から軽井沢迫分まで佐渡の金銀輸送路のことである。初めてこの道歩いたのは平成十二年のことだった。先日ふるさと交流会で柏原に寄ったが、こも街道の宿場の一つで懐かしい所だ。街道は越後路と信濃路に大別されるが、前者は海と山の自然環境に優れ、後者は情緒のある集落や歴史遺産に優れて甲乙つけがたい。距離も鉄道で二百キロ余だから東海道の半分以下である。江戸幕府の黄金輸送隊はこの道を通り迫分から中山道に入って御金蔵まで全十一日間の旅を続けた。この稿では街道の主な宿場や道中の見聞を紹介して読者の旅心を誘ってみたい。

出雲崎 佐渡金銀の陸揚げ地として栄えた。良寛は名主橋屋の跡取りだったが

親の期待に反して出家、おかげで同家は没落したが、いまや名僧の町として家名ともども天下に名高い。良寛堂や記念館、光照寺など見所が多い。尼瀬は日本石油産業のメッカで記念公園は一見の価値がある。芭蕉は出雲崎から佐渡を遠望して『荒海や』の想を得たという。町外れに近い勝見温泉はおばあさんが一人でやっついて湯量豊富、夕日を眺め手作り料理で歓待していただいた。今も健在だろうか。

柏崎 良寛を思慕した貞信尼の墓や日蓮上陸の地、番神堂やえんま堂など見所の多い宿場。右手に日本海、左手に米山を見て歩く。鯨波を経て米山三里の難所を越え鉢崎に至る街道は風光明媚の一語に尽きる。途中上輪の六宜閣は明治天皇行幸の折り食事を差し上げた庄屋の子孫

が経営する割烹旅館、タイの塩焼きの昼食が旨かった。義経伝説の亀割峠を過ぎ米山大橋を横目に山と海辺を上がつたり下ったり。骨は折れるが景色はすばらしい。鉢崎の手前で聖ヶ鼻に行く道も海岸沿いの道も閉鎖されていて国道のトンネルを歩かされるのが難点だ。



青海川旧道入口

鉢崎 柏崎の宿を嫌った芭蕉は出雲崎からここまで疲労困憊の強行軍をして越後嫌いになったみたいだ。聖ヶ鼻の岬の下に関所があり芭蕉の泊まった宿跡の標柱が立っている。

柿崎 バゴダ風の浄善寺に宿を断られた親鸞が枕に使ったという石がある。倉田

百三「出家とその弟子」の舞台。上下浜の温泉ハマナスで潮風に吹かれながら露天風呂で汗を流す。

潟町 街道の海側は砂防林が延々と続く。「小さな蔵の大きな夢」と樽に書いた潟舟の蔵元に出会った。炎天下に生詰の小瓶をラッパ飲みしながら歩いた。

黒井 宿中心の本教寺に芭蕉の句碑があるが寺にも黒井にも無関係の句。
さびしさや花のあたりの翌ならう

春日新田 椎谷・栃尾と並ぶ越後三大馬市があった所。これを始めた博労高浪忠太夫の墓がある。春日神社の参道にはかつてこと沼垂（新潟）を結ぶ北越鉄道の駅があった。長野方面から信越線で直江津にきた客は関川を舟で渡ってこれに乗り換えた。



杉臣 武さん

高田 関川に橋が無かったのは高田の殿様の城下町繁栄の策略だったらしい。旅人は繁華な港町を横目に川の東岸を稲田まで歩き、橋を渡って城下に入った。天下の妙高山を眺めてもくたびれた足には慰めにならなかつたらう。

新井 今は寂れた商店街も江戸時代は高田の殿様が領内の物価調整の目安にしたという賑やかな町だった。高田の朝市に似た六斎市をひやかして歩く。二本木へ行く途中の小出雲坂は越後見納めの坂として惜別の涙を誘った所。

二本木 小出雲坂を過ぎたあたりから道脇に馬頭観音像が増えてくる。坂道の連続でも馬も難儀したのだろう。

関山 関山神社は見所の多い神社だ。古来なんぼいさんという豊作祈願の妙高登拝の出発地である。いけ込み式という上半身を地上に出した石仏や変わった様式の大仏石もある。旧道を大田切川まで下る途中に清水が湧いている。果の百名水「大田切沢水」で車で汲みに来る人も多い。

関川 この関所は女改めの厳しいことで知られていたそうで、記念館にもそんな人形がある。スノーシエッドの旧十八

号線は地元車しか通らない。柏原まで紅葉の季節に歩くのは気分最高だ。

野尻湖 ナウマン象博物館は一見の価値がある。妙高・黒姫を望む絶景の地。

柏原 一茶の里。旧宅や墓がある。宿内は彼の句碑だらけだ。

古間 柏原と交代で宿役を務めた。信州鎌の産地。

牟礼 古間から国道を突っ切って野道を行く。牟礼の手前の兎玉に幹の頭を切られて太い枝が直角に曲がった変わった樹形の松がある。ここが江戸と加賀の中間点。金銀輸送の中継地でもあった由。十王坂の閻魔像が面白い。

善光寺 牟礼から来る途中の三本松峠は一茶（幼名弥太郎）旅立ちの地。句碑がある。

父阿りて明本の見たし青田原
原池の観音堂は道教的雰囲気で面白い。
この後道は善光寺の大門に通じている。
「かるかやさん」こと西光寺には県下最古という芭蕉の句碑がある。

雪ちるや穂屋のすすきの刈残し

丹波島 長野市街を抜けて犀川を渡る。

明治に橋が架けられるまでは兩岸に張った綱を伝って舟を漕いだという難所。

矢代（屋代） 川中島の古戦場は街道から少し離れている。北原の延命大仏は紙の表面に漆を塗った張り子の仏。篠ノ井の市街を通り千曲川を渡って宿場に入る。

下戸倉 屋代を過ぎると白壁の民家が増えて来る。鋳物師屋・寂時・柏王など由緒ありげな地名も多い。南朝宗良親王ゆかりの柏王神社は崩落危険箇所指定された急傾斜地に建っていて危なっかしい限り。宿場の中心にある坂井名醸は創業四百年の酒屋。竹久夢二がこの酒を愛し、夢二の絵をラベルにした酒を売りそば屋も兼業している。茅葺きの店でウインナルツを聴きながら吟醸酒を飲みそば切りを食べるのも乙なものだ。宿場外れの千曲川畔の万葉公園には五木ひろしが歌った「千曲川」の歌碑がある。万葉超音波温泉という公衆浴場も地元の人話を聞くには絶好の場所だが、石鹸などは自分持ち。

上戸倉 小さな宿場で下戸倉と交代で宿役を務めた。

坂木 戸倉から坂木に来る間千曲川沿い

の街道は明治天皇の北陸行幸まで断崖の中腹を通る所があり、横吹八丁の難所と言われて加賀の殿様もここは徒歩で通った。武田信玄が村上義清の葛尾城を落としたとき、断崖から逃げ落ちて来た奥方たちが川を渡してくれた船頭に筭を与えた故事に因んでこうがい橋という橋が架かっている。坂木には白壁の古い名主や本陣址が残る。

鼠 坂木を出て街道を外れた葡萄畑の中に格致学校という明治の洋風建築の校舎が残っている。宿名のネズミはネコに追われたネズミが山を食いちぎって逃げた民話に由来すること。その岩鼻の険の断崖に押しつぶされそうな格好で会地早雄神社がある。芭蕉句碑や万葉歌碑などがあつてにぎやかだ。この先の塩尻や秋和は白壁や土蔵・土塀が連なつて風格のある集落だ。かつての養蚕王国の名残である。

上田 六文銭の旗印真田一族の城下町。上田城には天守閣がなかった。今残っている櫓は明治の廃城で遊郭に売り飛ばされたが、大戦中に市が譲り受けて復元した。真田太平記館では作者池波正太郎の自作のすばらしい年賀状を見ることができ、市街を抜けると信州大学繊維学部、その先の国分寺址を経て海野宿に入る。

海野 海野は昔ながらの宿場の雰囲気を残す町として観光客に人気があるが、白壁・格子戸の雰囲気は手前の大屋や西海野から濃厚になる。西海野などは観光客がない分静かで昔の旅人気分が味わえる。こういう雰囲気は残念ながら越後路にはない。宿場外れの白鳥神社は木曾義仲卒の地として知られる。



本海野

田中 海野と交代で宿役を務めた。田中の先の牧野に力士雷電の碑がある。彼はこの近くの大石で生まれた。幕内二五四勝一〇敗、佐久間象山の筆になる石碑は削られてぼこぼこだ。これでは困ると山岡鉄舟などが同じ物を隣に立てたがこちらは人気無く原型を保つ。

小諸 浅間山を眼前に見る旅情豊かな町。小諸城の大手門・三の門や本陣・問屋場の建物ばかりではなく町全体に漂う情緒が良い。味噌工場・太鼓店、庵看板の商家、藤村が勤めた小諸義塾に「惜別の歌」の碑があった。藤村が歌ったのは師を慕う妹の心情だが、戦時下の学生は出陣する友を送る歌として改作し密かに歌って世に広めた。藤村が通った一膳飯屋の揚羽屋で揚げ出し豆腐を肴に浅間嶽の濁り酒を飲んで文学青年の気分を味わう。

追分 小諸を過ぎると十石峠に続く登り道。かつての北国街道より大分高い所を行く。峠を過ぎて馬瀬口の長泉寺は神社か本堂がよく分からない建物で石仏や馬の像がある。その奥へ大分入った柵口神社はマセグチと読む。このあたりは牧場だったのだろう。交通量の多い追分原から少し歩けば分去れに着く。観光写真でおなじみの石灯笼や子どもを抱いた石仏に一里塚。ここが終点でこの先江戸までは中山道を通る。追分の宿に入ったら何はともあれ泉洞寺に行こう。ここには堀辰雄が愛したお地藏さんが待っている。衆生を救う前に歯医者に連れて行ってもらいたいと訴えているようなしなかつ面のお地藏さんだ。



歯痛地藏さん